和田ながら×シャンカル・ヴェンカテーシュワラン(インド)

『「さようなら、ご成功を祈ります」(中略)演説『カーストの絶滅』への応答』第1回報告書〈事業の立ち上げ〉

柴田隆子

『「さようなら、ご成功を祈ります」(中略)演説『カーストの絶滅』への応答』は、南インド・ケーララ州を拠点に国際的に活躍するシャンカル・ヴェンカテーシュワランと、京都を拠点に活動する和田ながらが、カースト制度の廃止を訴えた『カーストの絶滅』を出発点として、どの社会にも存在する「社会的排除」をテーマに共同で演出に取り組むプロジェクトである。

『カーストの絶滅』について

本プロジェクトで取り組む『カーストの絶滅』は、インド憲法起草の中心人物であり、不可触民解放運動の指導者B.R.アンベードカル博士(1891–1956)が執筆した演説原稿である。1936年に予定されていたカースト撤廃協会年次大会に議長として招かれたアンベードカルは、議長演説のためにこの原稿を用意した。しかし、協会構成員であるヒンドゥー教徒をも激しく攻撃するアンベードカルの見解は協会には受け入れ難く、修正を求めたことから決裂し、議長招待は撤回されたため、演説は行われなかった。アンベードカル個人によって出版されたこの演説原稿は、その後のインドの反カースト抵抗運動における重要な著作となっている。

制作の第一段階:オンラインによるミーティングとリハーサル

本プロジェクトは、2021年よりヴェンカテーシュワランと和田を中心に続けられている『カーストの絶滅』についてのオンライン研究会での対話の延長線上にある。本来は演説として聞かれるべきテキストであった点に注目し、アンベードカルの言葉の背後にあるパフォーマティブな側面と意図を探り、演劇作品として舞台に立ち上げることを目論む。制作の第一段階として、Zoomを用いたオンラインによるミーティングとリハーサルが行われた。

参加者(敬称略)

インド側:シャンカル・ヴェンカテーシュワラン(演出家)、
鶴留聡子(プロデューサー)、アニルドゥ・ナーヤル(俳優)、
チャンドラ・ニーナサム(俳優)

日本側:和田ながら(演出家)、武田暁(俳優)、森山直人(ドラマトゥルク)、
川原美保(プロデューサー)

オンラインミーティング(2022年9月30日)

演説後のポストパフォーマンストークとしての上演という公演形態が仮決まりしており、それを実現させるために、俳優と演出家の区別なくフラットな土俵でオンライン稽古の方向性が話し合われ、和田からの提案で俳優が演説としてテキストを朗読してみることに決まる。インド側の参加者であってもテキストとの距離感は様々であり、身の回りにあった経験を思い出したり、自分の経験につながる問題として捉え直したりする一方で、「カースト」や「ヒンドゥー」に基づく文化の中で自分を形成してきたものから抜け出せるかはわからない、といった発言もあった。日本側はといえば、ロジカルな文脈と現実とのギャップがあり、抽象的にしか捉えられないが、このわからなさの重要性を俳優も演出家も感じていた。そこで、声に出して読むリハーサルプロセスを経ることで、テキスト内の権力や階級の問題などを身体的に捉えた上で、議論してみることになった。

オンライン・リハーサル(2022年10月21日–30日)

いくつかの章ごとに、アニルドゥ・ナーヤルが英語、チャンドラ・ニーナサムがカンナダ語、武田暁が日本語のテキストを順番に読む。発話することにより、また耳で聞くことにより、テキストの意図や言葉の持つエネルギーが理解できるようになる。ショートセンテンスで畳み掛けるような英語版や、カンナダ語版の間の取り方など言語間の違いも指摘された。元々の演説原稿は英語で書かれており、カンナダ語は翻訳者のカーストである支配階級に受け入れやすいよう翻訳されているとの指摘がミーティングであったが、それが体感的に示された1つの例である。朗読の後は、実際に読んだ俳優から積極的に書かれた内容や発話する際に感じたことへの疑問などが出され、活発な議論が行われた。

来日前のZoomミーティング

リハーサルを傍聴して

丁寧に議論されていたのは、日本という異文化の観客に向けて、テキストに書かれている問題のうち、何をどのように提示するのかという点であろう。パフォーマーが多文化であることも意識されていた。文化的理解の不均衡を埋めるためのディスカッションだが、ともすると、日本側の参加者は他者として「カースト」について学ぶ方向に向かいがちである。そのため、日本の事例でも内面化されている差別の構造を考えることになり、和田からは女性差別があげられた。当初の反応としては、なぜ日本

の部落問題ではないのか、という疑問がインド側の参加者にあったように筆者には感じられた。しかし、女性の問題は共通項として無事に機能したようで、リハーサルの後半では上流階級にはある様々な汚れを浄化する抜け道が、下層階級や女性にはなく、社会構造そのものが上流階級にとって生きやすい仕組みになっていることなどが指摘されている。

リハーサルの間に何度かヴェンカテーシュワランから、カーストの問題は不可触民や非支配階級の問題ではなく、支配階級の問題なのだという指摘があった。差別された経験を持つ者は撤廃を望むが、差別の構造により益を得ている者の多くはそのことに無自覚である。また文化は家族など人々のつながりの中にあり、差別を助長するからといって全てを捨て去るのには葛藤がある者もいる。異文化の出来事として他者をまなざす視線は、その構造を浮き彫りにするが、解決にはならない。自らの体験や身体感覚を通して投げかけられる疑問を、今後どのように空間的に立ち上げていくのかが気になるところである。

インドでのリハーサル風景